

LIGHT UP ROTARY ローターに輝きを

2014～2015年度

国際ロータリー第2660地区 第2組

# INTERCITY MEETING

## 報告書



日時 3月14日 (土) 13:30～17:00

会場 ホテル阪急エキスポパーク  
オービットホール

ホストクラブ

吹田西ロータリークラブ



## 国際ロータリー第2660地区IM2組 インターシティミーティング2014-2015

～ひとりひとりの輝きで  
あなたの地域を輝かそう～

●日時:2015年3月14日(土)  
午後1時30分～  
(登録受付:午後1時より)

●会場:ホテル阪急エキスポパーク  
オービットホール

●講師:中西 麻耶 氏  
(パラリンピアン陸上競技)

・主宰者 : ガバナー 泉 博朗  
ガバナー補佐 簡 仁一

・ホストクラブ : 吹田西ロータリークラブ

Rotary International District 2660  
INTERCITY MEETING 2014-2015

## 主宰者

ガバナー 泉 博 朗  
ガバナー補佐 簡 仁 一

## ホストクラブ

会 長 田 中 慶 一  
会長エレクト 青 木 建 雄  
副 会 長 井 伊 圭 一 郎  
幹 事 本 田 智 教

## IM実行委員会

委 員 長 小 林 哲  
副 委 員 長 橋 本 徹 也  
副 委 員 長 清 水 大 吾

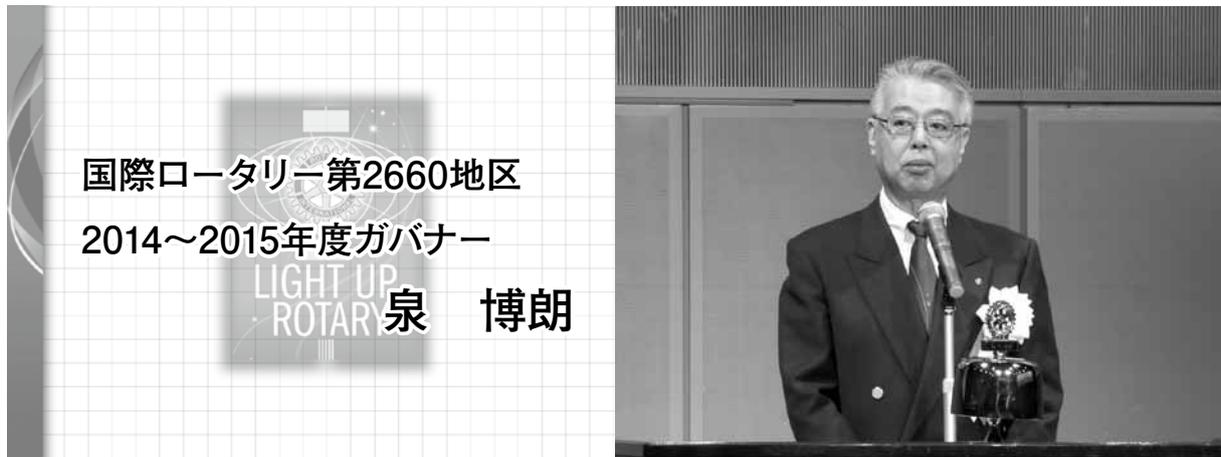
## テーマ

ひとりひとりの輝きであなたの地域を輝かそう

## プログラム

時 間	内 容	担当(敬称略)
13:00~13:30	登録受付	
	名刺交換・自己紹介	
13:30~14:05	【開会式】	司 会 清 水 大 吾 矢 倉 昌 子
	1.点鐘	ホストクラブ会長 田 中 慶 一
	2.国歌斉唱 ロータリーソング「奉仕の理想」	ソングリーダー 毛 利 征 一 郎
	3.来賓・主宰者紹介	
	4.ガバナー挨拶	ガバナー 泉 博 朗
	5.出席報告	IM実行委員会 副SAA 堀 豊
	6.実行委員長挨拶	IM実行委員長 小 林 哲
14:10~15:25	【講 演】 「あきらめない心」 講 師 中西 麻耶 氏 (パラリンピアン陸上競技)	
	謝 辞	ホストクラブ会長 田 中 慶 一
15:25~15:40	休 憩	
15:40~15:50	パフォーマンスショー	ガンバ大阪チアダンスチーム
15:50~16:40	クラブ紹介	
16:40~17:00	【閉会式】	
	1.所感・次年度ホストクラブ紹介	ガバナー補佐 簡 仁 一
	2.次年度ホストクラブ会長挨拶	千里メイブルRC会長 高 尾 修
	3.手に手つないで	ソングリーダー 毛 利 征 一 郎
	4.点鐘	ホストクラブ会長 田 中 慶 一

## ガバナー挨拶



皆様こんにちは、本日はお忙しい中、この様に多数お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。本日は国際ロータリー第2660地区第2組のインターシティーミーティングでございます。

簡ガバナー補佐の下、皆様がこのように集い、お互いに交流し、情報を交換し、ロータリアンとしての誇りと自信を確信し、友情を深める大切な行事であります。まずは、この様な素晴らしいIMをホストしていただきました田中会長、小林実行委員長をはじめ、吹田西ロータリークラブの皆様にご挨拶申し上げます。また、テーマを地区方針の「ひとりひとりの輝きであなたの地域を輝かそう」としていただきました事、誠に素晴らしいことでございます。

さらに、陸上競技のパラリンピアンであります「中西麻耶」様をお招きし「あきらめない心」としてご講演をいただきます。中西様には、そのくじけない、強い心に感動をいたしております。今、私たちに必要なものは強い心、強い意思を持つ事です。強い心を持ち、自信に満ちた、奉仕活動をいたさねばなりません。本日は、是非ともその事を学んでいただきたいと思っております。

パラリンピックと申しますと、あるロータリアンから伺ったご意見をお知らせしたいと思っております。その方は、オリンピックのなかにパラリンピックを統合し、同じ舞台で開催してはどうかというご意見でありました、つまり種目で分けるということでした。皆様いかがでありましょいか、まずは身近な競技会、府県大会や、国体、日本選手権から考えるのもいいのではないかと思います。

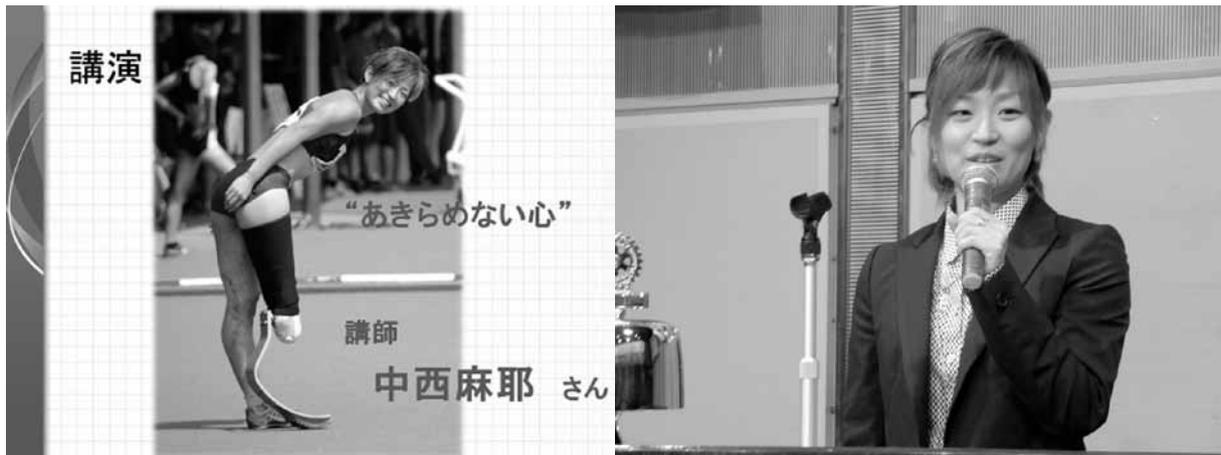
今回、この様に意義のあるIMを実施していただきました。吹田西ロータリークラブの皆様にあたためて感謝申し上げます。開会のご挨拶とさせていただきます。

# 来賓紹介

## 来賓紹介

ガバナーエレクト	立野純三 様
パストガバナー	近藤雅臣 様
パストガバナー	大森慈祥 様
ガバナー補佐(第1組)	西宮富夫 様
ガバナー補佐(第3組)	西邨智雄 様
ガバナー補佐(第4組)	井川孝三 様
ガバナー補佐エレクト(第2組)	新井 清 様
地区代表幹事	川上富清 様

## 講 演 「あきらめない心」



### 講師紹介

#### 中西 麻耶 氏 (パラリンピアン陸上競技)



1985年大阪市福島区生まれ。大分県由布市庄内町出身。高校時代にはソフトテニスの選手としてインターハイで活躍。地元大分国体への出場を目指していた06年に仕事上の事故で右足膝下を切断。07年から陸上を始めて僅か半年後の障害者陸上大会で日本記録を樹立し、08年北京パラリンピックにおいて100m6位、200m4位入賞を果たした。その後、練習拠点を米国サンディエゴにあるナショナルオリンピックトレーニングセンターに移し、ロサンゼルス

五輪・三段跳び金メダリストのアル・ジョイナー氏から幅跳びの指導を受け、ロンドンパラリンピックに出場。現在は、練習拠点を大分に移し、女子パラリンピック選手では世界初となるオリンピック出場も視野に入れ、16年リオデジャネイロパラリンピック、20年東京パラリンピックでの金メダル獲得を目指し活動している。また、14年ジャパンパラリンピック陸上競技大会では、女子走り幅跳びにおいて、これまでの日本記録5m02cmを更新し、5m27cmの日本新記録、アジア新記録を樹立している。

## 講演趣旨



皆さん、こんにちは。初めまして、中西摩耶です。

実は、生まれは、大阪の福島区なんです。玉川というところなんですけれども、玉川小学校、玉川公園とかでは、よく遊んでいたのですが、小学校4年生のときに大分に引っ越し今に至っています。

講演を始める前に、ちょっと急なお願いなんです。今、皆さん、椅子に座ってますよね。ちょっと、自分が呼吸しているか確認してみてください。えらい、静かに呼吸されるんですね。確認してみてください。しっかりと確認できた方、いらっしゃいますか。「いや、ちょっと確認できなかった」という方が、もしいらっしゃったら……、大丈夫でしょうか。皆さん、確認できましたか。

今の「呼吸をしてください」と言う前は、皆さん、私がしゃべってる話に興味を持っていたと思うんですが、今、自分が呼吸してるか確かめるときっていうのは、自分が「スー」っと吸って、「フー」っと吐くことに集中しましたよね。そのときに、「無」になったのが感じ取れた方、居ますか？ いらっしゃらない？ 皆さん、呼吸の確認ができていなかったということです。

呼吸をすることに集中するまで、私の話を聞いていたというのは、どういうことになるかということ、人間っていうのは、実は、日々いろんな雑音の中で生きてるんです。今、自分がしている行動に、そこまで集中したことってないと思うんです。たまに、「ランナーズハイ」とかいう言葉を聞きますね。あのときは、もう「今、走る」ということに集中してるんです。今、右足を出す、左足を出すという行動自体に、一つ一つの行動自体に集中してるんです。要するに、「無」なんです。ただ、人間っていうのは、いろんなことを考えてしまいます。

例えば、演壇に水を用意してもらってますけれども、この水を飲んでみます。皆さんに注目されている中、水を飲むというのは、とても恥ずかしいんです。このボトルのキャップは閉まっています。「開いてたら、すんなりつげたのに」というのはやる気持ちを抑えて、キャップを開けるわけです。このときの「カチャ」っていう音を聞いて、ボトル

を置きます。コップを手に取ったときに、「グラスが綺麗だ」とか、全てに集中して見ますよね。普通だと、この間に、何も考えないうちに「早く、この中に水を入れなきゃ」って思うんです。「こんなにたくさんの人を待たせてるのに、早く水を飲んで話をしなきゃ」と思うわけです。ただ、自分が飲むことに集中する。水を入れますよね。この音も、「美しい」と思えるわけです。一刻も早く、水が飲みたい。ここからバシャッとこぼれるくらいの勢いで、グラスを口に運びたいところをしっかりとこらえて、グラスが口にくるまでを、また集中して水を飲む。

ここまで集中して、人というものは行動を起こすこと、それは難しいと思うんですけれども。何が言いたいかというと、私たちは「今」ということに全く集中していないんです。じゃ、何にとらわれて生きていますか。過去と、未来なんです。

でも、未来というものは、今の行動がないと存在し得ないものですよね。ということは、日々の皆さんの雑音の中で作りだしている世界というのが、実は未来なんです。

「え、でも、過去はあるじゃん」って思った方、たくさん居ると思うんですけれども、同じ過去というものは、ないと思うんです。全く同じ条件、全く同じスピード、全く同じ考えで繰り返すってないんです。似たようなことってあると思うんですけれども、全く同じ物事に出くわすことって、きっともう二度とないと思うんです。じゃ、何で過去にとらわれるかということ、その過去を経験して起こったこと、トラウマを感じて、恐怖心というものだけで、自分の頭の雑音がストーリーを実はつくってしまってるんです。

それだけ、時というものは、私、凶悪犯だと思ってるんですけれども、警察が頑張って「時」というものを捕まえようとしても、捕まえることできないですよね。ここに開いたペットボトルがあって、「何で、この水は減ってるんだ」。時の経過と共に、減ってるわけなんです。それだけ、私たちは時に支配されてるんです。

でも、今起こり得ている物事に集中しているとき。それはどういうことかということ、今、一番分かりやすいものと思って、「呼吸をしているかどうかを、確認してください」って言いました。そのときに、「ああ、確かに、私は今ここに生きています」ということを、皆さん実感しますよね。ですよ。

登山家が険しい山を登るときにあ、必死になって登ると思います。「次、どこに足を掛けよう」。要するに、「今」という次元に集中していますね。だから、頂上に上がったときに、スカッとします。それはなぜかということ、生きてる時間を感じてるからなんです。

スポーツも一緒です。がむしゃらに毎日やって、パラリンピックの舞台でメダルを取りました。そのときに、何ともいえない快感を感じました。それは、「メダルが取れたか

ら、うれしい」とかじゃなくて、「今ここに、自分がある」ということを実感したから、すっとするんです。でも、それって、「今」という次元に自分がないと感じられないことなので、また雑音にとらわれて、「ああ。また、練習しなきゃ」って思うんです。でも、「今、自分がしっかり呼吸してるかな」っていうのに集中する、「生きてる」と感じる。これって、実は、皆さん、死ぬまでできることなんです。

「目的のための、今を生きましょう」って言うと、日本語的にもおかしいじゃないですか。目的というものは、皆さん、未来のことを指しますよね。「今やったことの積み重ねが出てくる、その先にある目標」と思う方が、多いと思うんですけれども。「『今』という現実に関心を持って置くことが、まずの目的」というふうに考えて欲しいんです。それだけ、今という時間を大事にして欲しいなと思うんです。

それがどういうことかという、死ぬまで今、自分がここに存在することを確かめるということは、諦めずに人生を生きることだと思いませんか。きっと、私が急に呼吸のお話をしたので、「どんなマルチ商法が始まるのか」と、「何か、変な宗教に入れられるのか」と思った方がたくさん居ると思うんですが、私もやっと本題に入れて、今ほっとしました。

「あきらめない心」ということで、今日はお話しさせていただきますが、これ、「私だから、できた」とか、すごい境遇に立たされないと、人は「諦めない」という心が出てこないのかと思ったら、そういうことじゃなくて。私たちは、日々、日常の中で、諦めずに何かの行動を起こしているということに、気付いて欲しいなと思うんです。そして、「時」という雑念にとらわれなくて欲しいな。未来や過去に縛られるんじゃなくて、今しっかり生きることに関心したら、きっと私たちはもっともっといい生活を送れるんじゃないのかなと思います。

私たちは「時」というものを、無駄にしていることが多いと思うんです。だから、私にとって諦めないこと、障がいを持って今、生活していることっていうのが、特別なことではないということ、ぜひ覚えて欲しいなと思います。誰もが、できることなんです。それを、ただひたすら毎日、私は積み重ねてきてただけの話なんです。

私、2006年に足を切断してしまうわけなんですけど、それまでずっとソフトテニスをしていました。でも、残念ながら、私の行った中学校っていうのが、「ソフトテニス、楽だから入っとけ」っていうような部活でしかなかったんです。なぜ、そんなに私がやる気満々だったかという、私は一般のクラブチームに所属してテニスを続けていたので、クラブチームに行って大人と一緒にするときは楽しいんだけど、中学校に行ってテニスをする、「何、あいつ、はりきってんねん」という風でした。「どうしようかな」と考えたときに、やっぱり悔しかったんです。その温度差っていうのも、悔しかったですし。やっぱり、そ

ういう苦悩というかをシェアできて心を許せる友達というのが、やっぱり居なかったんです。

進学したかった高校は大分の伝統校です。最初、高校に手紙を書きました。テニス部の監督に「一度、私のプレーを見てください」ということで、手紙を2通ぐらい書いたんですけど、返信、来ないわけです。それは、多分、監督からしたら、「何だ、この変な手紙は」と思って、読む前に捨ててたんじゃないかなと思うんですけども。

それで、電話をしたんです、高校に。「ソフトテニス部の監督さん、いらっしゃいますか」って言って。

監督さんと電話がつながり、自分の思いを語ったんです。

「ぜひ、一度、高校に行くので、私のプレーを見てください」ということで、「そこまで言うなら、おいで」と言われて行ったんです。でも、全日本級の生徒がごろごろ居る高校なので、練習についていけないんです。高校生と中学生という体格も違いますし、それは当たり前なんですけれども、全くついていけなくて、「これは、多分、採ってくれないだろうな」と。また、その高校が、「推薦じゃないと、テニス部に入れない」という高校だったんです。だから、「もう、終わったな」と思ったんですが、推薦で入学できました。

そこまではよかったです。でも、現実というのは、ものすごく厳しくて。まず最初に、新入生として自己紹介をするときに、伝統のある中学校が、どんどんあいさつしていくんです。「福岡から来ました」とか、「長崎から来ました」とかいう子も、もちろん居るし。その中で、「庄内中学校から来ました」っていうと、「はあ？ どこ？」って先輩方に言われるんです。そこで洗礼を受けました。

1年生は5人しか居なかったんですけども、誰かがミスしても連帯責任になるんです。そうすると……、今では「体罰はいけない」とか、そういう時代になりましたけど、私の年代はまだ、ずっと正座させられたり、「水は飲むな」と言われたりするような時代だったんです。なので、5時間ぐらい「ミーティング」という項目で、先輩たちの愚痴のはけ口になっていました。

でも、「負けたくない」と思って、2年生からレギュラーでしっかりと出場するようになって、私たちが高校2年生のときに九州大会、優勝したんです。私もそのときに、メンバーには入ってんですけども、一番手が出たり、出なかったりというようなところだったので、その九州大会っていうのは、「自分でつかんだ」というよりは、「先輩のおかげで、優勝できたな」という感じだったんです。だから、「3年生の最後の夏は、自分たちで勝てるようにならないといけないな」と思っていました。

私たちのときは、「16年連続 県大会優勝」という伝統を引き継ぐ年だったんですけども、負けてしまったんです。最後の三番手勝負で負けてしまったんですけども、その三番手に出たのが私だったんです。やっぱり、責

められました。「庄内の子を出したから、負けたんだ」っていうふうに、もう何十年も前のOGの先輩にも言われて…ずっと、謝って謝って。なので、大学進学……、もちろん行きたい大学もたくさんあったんですけども、もうそのときには心も折れてたので、「私は、もう一生テニスをしちゃいけない。この伝統を崩してしまったんだから、テニスができる立場の人間じゃない」って思っていました。そういうこともあって、大学進学というのをやめたんです。

ただ、それでもやっぱり「テニスをしたいな」という気持ちがあったので、「社会人テニスの方に行って、ゆっくり、のんびりテニスしたらいいわ」という感覚だったんです。でも雑誌を見たりすると、自分の同期が大学に進学して、活躍している姿を見てしまうんです。そうすると、やっぱり、「ああ、大学行きたかったな」と。

社会人として18歳のときに、テニスもして、仕事もしてというのが、ものすごくきつかったんです。いい意味でも、悪い意味でも、手が抜けなかったんです。というのは、高校3年間、少しでも手を抜いたら、絶対責められる立場だったんです。自分でも、すごい理不尽だと思ってます。「庄内中出身の無名校から、伝統校に来た」、ただそれだけで全責任をすぐに負わされちゃう立場だったので、もうコートの手前から端まで、寮に戻ったら、寮の全ての洗濯物から掃除から、「抜け目がないようにしなきゃ」っていうことで本当に目を光らせてたので、仕事も手を抜けなくなるんです、自然と。

そうすると、テニスをする時間が、残業とかでなくなって。「同期は、こんなに思いっきりテニスしてるのに」っていうふうに、やっぱり、まだ若かったので、すごく複雑な気持ちになってたんです。

それで、社会人テニスの大会に出ると、そこには歴代のOGの先輩が居るんです。テニスは、プレーをする前に握手をするんですが、そのときに「ああ、あんた、あの庄内出身の子やろ」とか、あからさまに「ああ、あんたが伝統壊した子ね」とか言われてました。

2008年に、大分県で国体があり「じゃ、2008年に、きっぱりもうテニスやめよう。それまでは、誰に何を言われようが、思いっきりテニスをしてやるんだ」と思ったのが、二十歳のときだったんです。両親にも、「それまでは、もしかしたら仕事も、テニスに合わせて……、『テニスできるんなら、違うバイトで食いつなげる』とか言い出すかもしれないけれども、大目に見てね」という話を、成人式のときにしました。

鉄骨・鉄窓業の社長さんをしてた、友人のお父さんが声を掛けてくれまして、「事務員として、うちに、2008年まで雇ってあげる。思いっきりテニスをしてもらっていい。土日に大会があったなら、月曜日、休みを取ってもいい。その代わり、頑張れよ！」って言ってくれたんです。なの

で、2006年に就職したんです、そこに。

最初、私も事務仕事をしてたんですけど、ずっと机に座ってコンピューターをずっと見てるって、全然慣れなくて、そわそわしちゃって、すぐ何かしたくなっちゃうんです。15歳とか17歳の男の子とかも、作業員で会社に来てたんですけど、朝8時に現場には居ないといけないので、少し遠い現場になると、「朝4時半に、事務所に集合ね」とかいうときがあるんです。そうすると、来ないんです。朝早くに社長から電話があって、「誰々が来てなくて、電話も繋がらない。自分らはもう行かないといけないから、電話を掛けとってくれ」と言われて、ずっと掛けても出ませんわね。ということが何回かあったときに、「もう、どうせ来ないやろう。だったら、私、今日、現場に行くわ」って言って現場に出だしたのが、全ての始まりだったんです。2006年の4月にその会社に入社して、2006年の9月に事故に遭ってしまうんです。

その日もすごく現場が忙しいのに、この若い男の子、2人來ななかったんです。「納期も迫ってるのに、どうするんだ」、すごい、もうピリピリモードになってたので、いつもは、ちょっとペンキをそこら辺に配っておくとか、そういう簡単な仕事しかなかったんですけど、ずっとスポーツしてますから、それなりに力もありましたし、もう少しハードなというか、塗装する前に、鉄骨を綺麗に掃除をしてからじゃないと塗料が乗らないんですけども、そういう作業もしてたんです。

そのときに、「H鋼」って分かりますかね、5トン有るH鋼を吊っていたクレーンがバランスを崩して、倒れ、5トンの鋼材が私の右足に落ちてきちゃったんです。

最初、近くの病院に運ばれて、今でも忘れないですけども、看護師が「ちょっとズボンを切って、患部を見ますから」と言って、切って見たときの表情というのが「まあ、どうしましょう」という顔だったので、「ある程度、覚悟しないといけないな」という気にはなりました。「うちの病院では対処できないので、今から大きい病院に救急車で搬送します」と言われたときに、スポーツずっと中学校からしてますけど、大きいけがをしたことがないというのが、一番の自慢だったので、「骨折はしたことがないけれども、これ、骨折よりすごいんだろな」というのは想像して、何となく「切らないといけないんじゃないのかな」と思っていました。

その大きい病院に着いたときに、選択肢を二つもらったんです。一つは、取りあえずやってみないと分からないけど、細かい神経や血管を接合してみる。もし、将来壊死してきた場合には、切断ということしかないかもしれない。もう一つは、最初から切断だったんです。

私、足が残る、残らないより、何が大事と思ったかという、2008年にテニスしたかったんです。「そこで引退する」って決意していて、その場所に立つことによって、「高校

のときに感じたいろんなことだとかが、全て報われる」と思ってたので、何が何でもその場に立ちたかったんです。「残る、残らないじゃなくて、スポーツに早く復帰できる道はどれですか」って聞いたんです。

今日も普通に歩いてきましたけど、歩くときはいいんです、びっこで引いたって歩けますから。けど、スポーツするときは、体重を100%加重できないと、やっぱり難しいんです。テニスなんか特に、ある動作を押し殺さないといけないわけです、踏ん張って。右、左、前後、左右に動かないといけないので。「ってなったときに、そういう足が残りますか」って聞いたんです。答えは、「ノー」でした。「体重過重は、半分か、それ以下にはなるだろうね」と。ただ、私、21歳のときだったんです、その時は。「まだ結婚も経験してないですし、生身の足があるのと、義足であるということは、今は考えられないかもしれないけど、女性としての人生を考えたときには、後悔するかもしれないよ」と言われました。

でも、私の中では、「女性として生きる人生」よりも、「スポーツ選手として生きる人生」でしか、生きがいというものを感じてなかったの、「いや、私にとって大事なものは、スポーツですから、切断し手下さい」と言いました。もう二十歳過ぎてるし、世間一般からすれば立派な大人の仲間入りしてますから、それで手術室にすぐ行けると思ったんです。そうすると、手術が手術なだけに、さすがに「両親の承諾がないと、それはできません」と言われて。うちの家、大分市内から、大体、車で片道1時間ちょっとぐらいはかかるんです。その事故自体が午後3時半とか4時前だったんですが、その病院に着いたときは5時を回ってたので、ラッシュなんです。自分で一番よく分かってるので、「いや、先生。今から親に来てもらって、来るの、もう2時間後とかを考えた方がいいですよ」って、「いや、それでもちょっと」って言うので、電話をしてもらって。

母親が先に来たんですけれども、母親がやっぱり「これ、もう、私に判断できないわ」って言ったので、ものすごく私が怒鳴り散らしたんです。父親は今どき珍しい、携帯を持たない派なので、連絡のつけようがないんです。「お父さんは、どうしたん」って聞いたら、「そんなん、机の上に置き手紙をしてきたわ」って言うんで、「そんなん、いつ見るか分からんやん」と。いつも夜遅くまで仕事してる人なので、「いつ来れるかも分からんのに、待てんわ。ここは、もう、お母さんに決断してもらうしかない」ということで、いろいろ考えて。主治医の先生に、「『何か、本人の気が変わって「接合する」って言い出したので、今からその手術をします』と、嘘をついてください。」と。母親には、手術室出てきたときに、「『手は尽くしたんですけれども、あらためて患部を見たらちょっと難しく、切断になってしまいました』って言ってくれませんか」と言ったりと

か、いろんな手を使ったんですけど。最終的には私が母親に、「これから先、『やっぱり、あのとき足を残してたらな』とか、『何で、私には足がないの』とか、泣く、後悔するっていうことは、絶対に見せないから、お願い、足を切らせてください」って言ったんです。ちょっと母親も切れかけてたので、「そんなに言うんやったら、いいけど」っていうことで切断をしたんです。



ただ、やっぱり、父親がまだその場に來れていないというのが、ものすごく気になってたので、麻酔をしたときに……、「全身麻酔をして、父親が来てくれたときに目覚めてないって状況は、ちょっとやだな」と思ったので、下半身麻酔にしてもらったんです。だから、ほんとに「ああ、今、足がなくなっただな」という一瞬……、もちろん感覚はないですけれども、軽くなる感覚というものをじかに感じてたので、変な話「ああ、今、切ってるな」っていう、ものすごいゴリゴリいう音とかを、聞いてました。そして、手術室から出たときに父親に自分の口で、「自分の判断で切りました。ごめんなさい」と言おうと思ってたんです。

午後11時過ぎだったと思うんです、やっと父親が来て。私、もうずっと……、変な話、言い訳を考えてるんです。そもそも、事務員ということになってたので、「おまえ、何で現場に居たんや」ってなったときに、「どうしよう」と思っていました。

今日も20冊購入していただきましたけれども、『ラスト・ワン』という本を出しています。ちょっとネタバレにもなってしまって、しょうがないんですけれども。現場仕事に出るようになってから、立ったり、しゃがんだりする動作が多くなったんです。そうすると、女性用の下着だと、ちょっと食い込んでくるんです。それで、その日、父親の

パンツをはいて行っただです。トランクスだったら、そういう食い込みとかもなく、ストレスフリーで作業ができるのか試してみて、よかったらその日、買って帰ろうと思ってたんです、自分用のを。そしたら、事故に遭ってしまって、それは、手術に入ったときに脱がされてますから、どこに行っただか分からないし、「どうしよう」っていうのがあったので、「いろいろ、どういうふうによく言おうかな」と、言い訳をものすごく考えていたのを、今でも覚えているんです。

でも、病室に父親が入ってきたときに、全て裏切られるんです。「病院から、そうやって成人もしてるのに両親が呼ばれるって、もう死んだと思ったから、シャワーを浴びてきたで」って入ってきたんです。「私、何でこんなお父さんのために、『下半身麻酔にした方がいいかな』とか考えて、いろいろやってたんだらう」と思ったら、もうちょっとイラッとしちゃって、そこで今度は父親とけんかをしちゃったんです。

今思い返せば、それがほんとに精いっぱい照れ隠し、というか、私を元気づけたい……、もともとそういう冗談を、関西人ですから、すぐ笑いを取りたがるんです、うちの父は。

私、足を失って最初、貧血もすごかったんです、出血をかなりしてたので。輸血もしたんですが、間に合ってなかったみたいで。ほんと、ベッドから10秒も起き上がれないんです。すぐ、くらくらとして。だから、ご飯も座って食べれない。くらくらとした後に慌てて横になってるので、看護師の方に食べさせてもらったりとか。未だ若いのに、それがもう情けないというか……。ましてや、「自分は、スポーツ選手としてやってきた」という自負があったので、「人の手を借りないと、ご飯も食べれなくなっちゃったのか」。失ったのは、足だけだったんですよ。なのに、「ご飯も、もうこの先、自分で食べれないのか」とか。

もちろん、排せつもベッドの上だったんです。したくなったら、やっぱりナースコールで呼ばないといけななんです。それもすごく「うわー」と思って、情けないなど。

初期の頃はおかゆがよく出てたんですけど、病院のおかゆなので、味がないんで、梅干しを持って来てもらってました。梅干しと一緒に食べ終わって、種があるじゃないですか。私もすごい大ざっぱな性格なので、ごみ箱に種をプツって投げたんです。そしたら、入らなくて。コロコロとベッドの下に落ちてきたんですけど、拾おうと思っても手が届かなかったんです。そしたら、「ああ、私、もう、こんなことすらできなくなったのかな」と思って。その場は、母親も見てたんです。でも、約束をしますから、「何で、私、こんなのもできなくなったの」とか、「何で、こんなこともできないの」ということは、もちろん言いませんでした。「私、何も思っていないですけど」ぐらいの感じで、こうやって梅干しの種を拾おう、拾おうとしてた

です。

ただ、それを母親が父に言ったんでしょうね。ある日父が「今日は、プレゼントを持って来てやったんや」と言って病室へ来ました。父親からプレゼントを貰えるって、まあなかったんです。そしたら、マジックハンド分かりますか？ あれ持ってきて、「おまえ、これあったら、足なくてもいけるやろが」って言って渡してきて、またけんかを……。そんなこともありました。

そういう、まだ義足を手に入れる前っていうのは、自分の中でも整理ついているようで、ついていないというか。そもそも、「義足というものが手に入れば、何となく元の自分に戻るんじゃないのかな」と思ってたんです。「だって、立つことできるんでしょ。歩けるんでしょ。走れるんでしょ」って。それが、さっき話してた、今そこに居なかったんです。未来の自分の中で作り上げたものに、捕らわれていただけだったんです。だから、早く義足が欲しかったんです。

でも、初めて義足をはいたとき、「ああ、これはとんでもない、スポーツ選手として致命的な怪我をしてしまったんだな」ということを感じました。今日ここにはパンツスーツで来ているので、「ほんとに、あの人は義足なんやろうか」って思っている方たくさん入ると思うんですけど、義足なんです。それと一緒に、「履けば、何も変わらない、前の自分に戻れる」と思ってたんです。

それが、やっぱり現実は一筋きりだったんです。元になんて戻りませんでした。こうやって歩いてますけども、歩いてるところ、今日はヒールを履いてますけど、歩くこともできないんです。コンタクトをされている方、居ますか？ 皆さん、眼鏡派ですか？ それは、何ででしょう。コンタクトは、あんまりですか？

参加者： 性格に合わん。

中西： なぜコンタクトじゃなく眼鏡なんでしょう？

参加者： 嵌めるのが面倒くさいから。

中西： なるほど。模範解答が出ないですね。以前の講演会では、一発で、「入れるのが怖いから」って言ってくれた方が居たんですけども。眼鏡をしていても、裸眼なのは変わらないじゃないですか。そこに一つレンズを入れるっていうだけでも、「異物」って思ってしまうんです。だから、すごい違和感があると思うんですけども。

私にとって、義足はそういうものでしかありませんでした。異物なんです。「これは、私の足じゃない」と思いました。それより、「これで、どうやって立ってっていうの」っていう。切断をしているので、皮膚っていうのがまだ新しいんです。皆さん、踵……、私も、よく角質を最近取るよう

な年になりましたけれども、使えば使うほど、皮膚というものは固くなってきて。「胼胝」もそうですね。使えば使うほど……、私も、テニスをしてたときの胼胝が今だに残ってますけれども、鍛えられて。最初、中学校のときは、それこそ、胼胝ができて、めくれて痛くても、テーピングしたりして、無理やり痛い中、ラケットを振っていました。皆さんも、そういう経験がある方、居るかと思いますが。

それと一緒に、やっぱり痛くても、鍛えていくしかないんです。義足、履くしかないんです。履いて、履いて、履いて、履き慣れるしかないんです。要するに、また「0歳の肌に戻った」って思わないとしょうがないんです。全然、好きになれませんでした。

でも、朝起きたら、そこに義足があって、私はそれを装着しないと、どこにも行けないんです。車椅子に乗ることも、松葉杖をつくこともできます。でも、それをしてたら、多分、一生履けないんです。歩きたかったら、痛くても嫌でも、履かないといけないわけです。でも、ほんとに好きになれなかったし、「見たくもない」と思っていました。

自分で、どういうふう履くか分からないんです。一番最初にリハビリの先生から言われたのが、「中西さんは、もともと健康者だったんだから、足があったときのことを思い出して歩いたらいいのよ」って言うんです。皆さんにも、最初に確認しましたよね。「今、呼吸をしているのか、確認してください」、呼吸するとか、歩くとか、目で見ると、耳で聞くって、当たり前行為じゃないですか。それを、「じゃ、どういうふう今、歩いています？」って聞かれたときに、上手く説明できませんよね。

歩き方はもちろん、その人によって癖があります。私、テニスしてる時から、ものすごくO脚だったんですけども。最初言われたのが、義足っていうのは、いわゆるパイプみたいなもんですから……、そしたら、「ちょっと、O脚の人が義足をはくのは、難しいね」って言われて、「いやいや、もう切っちゃったし」っていう話になるじゃないですか。

それで、また、大分県っていうのも、切断する方はもちろん居るんですが、それこそ「糖尿病になって、切断しました」っていう、高齢の方が多いです。そうすると、「わしは、もう歩けないじゃ」って言って、もう車いすに乗ってしまうという人が多いので、義足のリハビリという知識がほんとに少なかったんです。なので、私、「え？

じゃ、どうしたらいいの」と思っていました。「思い出せ」って言われても、思い出せないし。「見るのも嫌になってきたし」って思ったときに、「いや、私、まず義足を好きにならないといけないな」と思ったんです。

朝起きたら、「わっ」と思うぐらい、生足っぽい足が、そこにぽつんと置いてあるわけです。何か、そのときはほんとに、「わっ、もう、気持ち悪っ」て思うぐらい、ほんとに



その当初の日本の義足というものは、いかにリアルに見せようか。もちろん、今でも特に女性用は、すごい「リアルコスメ」といって、シリコンカバーとかを使って、ものすごくリアルに足を再現できて。あと、義手とかもそうですけど、再現したりする技術っていうのが、ものすごく発達してきてますけど、でも、何となく自分の中で、それがまた嫌になってったんです。

なので、何をしたかという、今日、実際に使ってる義足を持って来たんですが、これ、日常用の義足なんです。柄を入れたんです。この黒い部分は「フレーム」といって、要するに、筋肉に見立てた部分です。これ、通常、肌色のスポンジを、皆さんはかぶせてるんです。それで、生身の足に近く見せてるんですけども、私はそれを外して、よく、ちっちゃい子と遊んだりすることが多いので、やっぱりお子さんは「義足」っていうのがよく分からないですから、すごい突進してくるんです。そうすると、ここ、もうパーツが中に見えるんですけども、当たると危険なので、こういうカバーを付けたんです。ただのカバーだとちょっと面白くないので、これはカーボンで自分の足を……、今、3Dプリンターとかありますから、3Dで再現してつくりました。柄も、実は中にも入ってるんです。

女性の方、「おしゃれは足元から」っていうじゃないですか。だから、要するに、お母さん、今日はお着物を着てますよね。着物の下に、もしお母さんがビーチサンダル履いてたら、どう思います？ 「あれれ？」って思うじゃないですか。お母さんは、今日の着物に合わせて草履にしましたよね。それが、おしゃれなんです。

だから、私も今日スーツで来るのに、これ、ヒール履けないんです。曲がらないでしょう、ここ、足首が。したら、もうスニーカーしか履けないんですけど、私も今日は見えを張って、皆さんに「足が長い」ということを見せたかったので、ちょっと長めのパンツを穿いてます。これ、ヒールを履かなかつたら、下にずってしまうぐらいあるんですけども。

これで、やっと私が義足であることが分かったと思うん

ですが、今日はこれでヒールを履いてきました。これは、自分で、調整がここで利くようになってるんです。ヒールの高さに合わせるができるんです。

ちょっと最近、怠けてしまっているんです。これ、3年か4年前ぐらいに、お正月のときに作ったんです。3～4年前、私に何が合ったかという、結婚式に行ったときに、さっきのような義足よりか、もうちょっとおめでたい感じ。今言ったように、「その場に合ったものを、履きたいな」と思って、こういうめでたい感じの義足にしたんです。ちょっと、かなり、ぼろぼろになってきたんですけども。

支柱の色も赤色をしますけれども、こういったパーツのカラーも、当時は選ぶことはできなかったんです。もう、アルミパイプのまんまとか。ちょっと格好いいのは、カーボンパイプになるんですけども、カーボンになると高いので、なかなか使うことはできないんですが。私、これもどうなのかと思うんですけど、幸いにも塗装業をしましたから、「アルミでも、色付けれるんじゃないの」と思って、実は色を付けたんです。

こういうふうにすること、要するに、さっき眼鏡の話をしましたけど、「俺には合わん」と言いましたね。要するに、そういうことなんです。私に合ったものを、身に付けているだけなんです。そしたら、義足を好きになることができました。逆に、「履きたい」と思ったんです。

「次は、どんな柄にしてやろうかな」とか思ったりとか……、私、アメリカに行っていたことがあったんですけど、ちょうどドラゴンボールを実写版でやって、ハリウッドで。そのときは、ドラゴンボールの柄の義足をはいていました。それこそ、年齢合っていなかったので、やめたんですけども。そういう工夫をして、私、義足というものを楽しむように変えたんです。それで初めて、私の中で受容したと思うんです、障害自体を。

私は目に見える障害ですけれども、皆さんもいろんな場面の中で悩むこと……、私たちって、どうしても人と比べてしまいます。無い物ねだりをしてしまうので、「何で、私だけできないんだろう」とか、卑屈になることもあると思うんですけども。要するに、それを「ネガティブシンキング」といいますが、私がもし、自分に足がないことをネガティブに考えてたら、そこから一生殻を破ることは出来なかったと思うんです。ここには、立ってなかったと思うんです。

また、皆さんに質問したいんですけども。いいところに水があったので、想像してみてください。これ、ペットボトルありますよね。水が入っております。皆さん、今、砂漠に居ます。いつ救助隊が来るかも分かりません、連絡手段もありません。何をしても無駄です。かばんの中には、この水がありました。いいですか。いつ救助隊が来るかも分かりませんよ。この水を飲むときに、「大丈夫、大丈

夫。まだ、こんだけある」って思う方、「ああ、もうこれだけしかない」と思って飲む方。ちょっと、手を挙げてもらいましょう。「大丈夫、大丈夫。まだ、これだけある」って思う方、手を挙げてください。下ろしてください。「もう、これだけしかない」と思う方、手を挙げてください。なるほど。それは、なぜでしょうか。

参加者： そう思った方が、減れへんから。

中西： なるほど。でも、砂漠ですよ。いつ、救助隊が来るかも分からないですよ。そういう状況の中で、「もう、これだけしかない」って思って、もっともっと自分を追い詰めて大丈夫ですか？

参加者： 大丈夫。

中西： ほんとですか？

参加者： 大丈夫。

中西： もう一度だけ、チャンスあげます。最後のチャンスですよ。「大丈夫、大丈夫。まだ、これだけある」と考える方、手を挙げてください。意思是固いですね。下ろしてください。「もう、これだけしかない」と思う方、手を挙げてください。下ろしてください。「何か、いろいろ言うから、分からなかったわい」という方、手を挙げてください。何と素直な。これこそ、マルチ商法でございませう。

やっぱり、大人じゃないですか。これ、よく、小学校に行って「もう一度やります」って言ったたら、「ああ、じゃ、間違いやったんやな」と思って、皆さん、意見を変えて手を挙げるんです。さすが、意思が固い。

もちろん、答えはないんです。どっちも同じ水なので、変わらないんです。要するに、価値観の方を考えて欲しいんです。ちょっと答えが割れちゃったので、私、どきっとしたんですけども。そして、最後まで揺るがないということにも。

「大丈夫、大丈夫。まだ、これだけある」って思ったときの、このお水の価値観と、「もう、こんだけしかない」って言ったときの、お水の価値観。どちらが、価値観が高いですか？ 「大丈夫。まだ、これだけある」の方が価値観が高いと思われる方、手を挙げてください。下ろしてください。「もう、これだけしかない」と思った方が、価値観が上がるという方、手を挙げてください。ありがとうございます。もちろん、ほんとに答えはないんです。

そうですね。「もう、これだけしかない」と思った方が、大事に飲もうと思えますよね。要するに、ちよびちよび飲むことになります。なので、ぐっと価値観が上がるんです。でも、よく「ネガティブに考えるの、やめましょうよ」とか、

今、特にうつ病も多いですけれども、そうしたときに、「ずっとネガティブに、卑屈にならずに、もっと明るくいこうよ」とか言いますが、「時と場合によっては、ネガティブに考えることもいいんじゃないのかな」と思うんです。そういう状況に陥ったからこそ、この水の本当の価値というものを知り得たわけじゃないですか。ただの日常にこの水があったら、それはただの「ボルヴィック」でしかありませんでした。でも、砂漠というところに行って、救助も来ない、あとは、この水に頼るしかない状況になったからこそ、価値観が出たんですよね。

なので、私も、世間から見たら、足が1本しかありません。そういった状況に立たされました。でも、だからこそ、「義足を、ファッションブルにしたらいんじゃないのか」とか。これって、多分、私にしか出来ない生き方なんです。



これも、実は、布でデザインしてるんですけど、これ、競技用の義足になるんです。ちょっと形状が違うんですけど、これ、また、柄が違います。ラメラメしてるの、わかります？ キラキラしてますよね。キラキラ輝けるように、ラメが入っております。こういうふうに、自分のそのときの感情であったり、願いを込めたりして、自分自身を楽しむ。これ、義足だからできることじゃないですか。皆さんがこれを見て、いくら「格好いい」と思ったところで、履けませんから。あと、履くために、何か変なことしないでくださいよ。

というふうに、考えを変えることによって、私は義足というものと、そして中西摩耶というものと向き合ってきました。でも、人と比べて「ああ、何か足りないな」と思ったところ、「欠点」っていうのは、逆から見れば「自分にしかないもの」なんです。弱みでもあり、強みにもなれる筈なんです。

皆さん、カヌーをしたことありますか？ カヌーは知ってますよね、溪流下り。私、「いろんなスポーツ、経験してみちゃえ」というのが好きなんで、実は、かなづちなんですけど、「カヌーしよう」と思って行ったんです。いろん

な説明を聞いているうちに、「いや、中西さん。あのね、カヌーっていうのは、激流に突っ込んでいくじゃないですか。だから、わざと転覆しやすいように作ってあるんです」って言われた瞬間に、「乗らん、乗らん」って言いました。だって、転覆するように作ってるんですよ。絶対、転覆するじゃないですか。泳げないのに……、あれって、ここ縛ってあるので、もうボートと一体化してるのに、私、「そんなの、流れていくじゃないですか！やめます、やめます」って言ったんです。そしたら、「いやいや、中西さん。転覆しやすく出来てるっていうことは、起き上がるのも早いんですよ」って。要するに、そこなんです。ネガティブなんですけど、ポジティブなんです。ちょっとロマンチックな話ですが、「カヌーって人生やな」って思ったんです。「転んでもいいけど、早く立ち上がっちゃえばいいんだ」って思ったんです。「スポーツは素晴らしいな」と、「自分の中で、感動した。これ、絶対、講演の中で使おう」というふうに、私の心の引き出しに入れたんですけど。

そうやって、ネガティブから生まれるポジティブさというものもあるので、人と比べての欠点とかに囚われることなく、要するに、そこに自分というものを、「今という次元において、自分に何ができるのか。自分は、何をすべきなのか」という視点で、人生を生きてくれたらいいなと思います。

「人と比べてにくい環境っていうのを、つくらなきゃいけない」みたいなふうになってるじゃないですか。一時期、運動会ワークと走って、みんな1位という時期がありました。でも、ある意味、人と比べなければ、自分のよさっていうのも分からないんです、本人も、そして周りの人も。なので、そういった意味では、一度、周りを見渡して「自分」というもの、そして「自分にしかないもの」を見つめ直す機会というものを、地域の中でもやって欲しいと思いますし。私自身もいろんなところに行きますけれども、そういう社会になっていってくだらいいなと思います。

今日の講演とは、またちょっと違うかもしれないんですけども。私は、「障害を持っていようが、持っていなからうが、人としてこの人生を生きるのに、何ら変わらない」と、いつも思っています。先日、私、とっても胸が痛む経験をしたんです。私もマネジメント会社に入っていますが、なかなかこの時勢、難しいんです。「国が、全部支援してらっしゃるでしょう」と思われることがたくさんあるんですが、今年も10月にドーハで世界選手権ありますが、選手はみんな自腹で行きます。滞在費が自腹だったらまだしも、日本代表のユニホームを買います。私、「それだけは、国から提供してあげてください」といつも言ってるんですけども、買うんです。自分で買って、そのユニホームを着て行く選手の気持ちというのは、ぜひ、ちょっと連盟も分かってくれたいなと思うんですが。そうやって、日々、費用を

捻出するのが、ものすごく困難になってきてます。

私、今まで2回、パラリンピックを経験してきましたが、2回、世界選手権を逃してます。というより、1回も世界選手権に行ったことないです。いつも年末の時期にさしかかって世界選手権の時期が来るので、やっぱり年末って……、私たちの一番のシーズンって夏ですから、費用が、もうかなり底をついている時期なんです。今日見せましたけども、この義足、1本130万……、ほんとに自分の好きなようにカスタマイズしたかったら、150万はかかります。これも、物ですから、いくらカーボンで出来ているといっても、使えば割れることもありますし、それなりに劣化します。今、カテゴリ4っていうのを使ってますが、これ、半年後には新品のままのカテゴリ4よりかは、かなり柔く感じるようになります。大体、もって半年なんです。だから、年に2回、それなりの車を買っていると思っていただいたらいいんですけど。私たち、これがないと走れないんです。どんなにトレーニングしても、結局これがないと走れないんです。

営業に行ってきましたというより、実は、今ちょっとアルバイトもさせていただいている状況なんですけれども。カウンター越しにお客さんに接客するんですけど、「顔も広いし、それなりの地位に居る方だから、味方に付けたら、ものすごくよくしてくれると思う。ぜひ紹介したいから、連れて行くわ」って言われたんです。「ああ、ほんと、ありがとうございます」って言って。ちょっと酔ってらしたっていうのもあるんですけども、名刺を交換した時点で、確かに私の名刺、ちょっと文字がちっちゃくて見えにくいんですけども、渡すときにも「いつも『見えにくい』って言われるんですけど、すいません、こちら、私の名刺です」と渡したんですが。「『これから、支援して欲しい』って思ってる立場の人が、こんなちっちゃい字の名刺を渡すな」と。「自分らがスポーツをしていくためには、わしらみたいな70代に頼るしかない人やから、その層に分かるような名刺を持ってるのが常識じゃないのか」と最初から説教をされまして、ずっと謝ってたんです。「きちんとした資料を、後日、御社の方に持って行かせてください。そこで、改めて、ご挨拶させていただきます」と。2時間、ずっとその話をされました。で、もうずっと謝ってました。「あなた、大体、『障害を持って頑張ってる』って聞いたから。あなたのことは知らん。何に頑張ってるのかも知らん。ただ、『障害を持って頑張ってる子がおるから、協力してくれ』と言われてただけで、今日来た。でも、大体、カウンター越しに突っ立っとったら、健常者にしか見えんやないか」って言われたんです。そこで、もう私ちょっと「え?」と思って。もちろん、私は「いや、健常者じゃないですよ」、「じゃ、障害者なんやな」と言われたんです。「いや、障害者でもないです。人です」って言ったんです。

そして、その後に色々言われたんですけど、要するに、

「あなたは健常者なんか、障害者なんか、どっちかはつきりせえ」と言われて。これ、私の永遠のテーマなんです。いつも営業に行くと絶対に言われるのが、「でも、あなたは義足履いて早くも走れるし、人並み以上や。障害とか、関係ないな」と言われるんです。

でも、あるときは、やっぱり「障害者」とされるんです。いっちゃんされるのが、オリンピック、パラリンピックです。今は、ちょっとずつ合併しつつありますが、今までナショナルトレーニングセンター、私たち……、今でも、使用許可、出てません。なぜかという、オリンピックって文科省なんです。ナショナルトレーニングセンターを建築したときに、文科省が費用を出してるんです。あと、文科省の下にあるスポーツ……、要するに、オリンピック競技の種目の協会がお金を出して、あの施設をつくってるんです。でも、私たち、厚生労働省なんです。一切、お金出してないんです。一切、お金を出していないというか、まるで違うところに居ますから、そういう話もなかったかも……、「しょうがないんじゃないか」とか思うんですけど。だから、「『何で、一銭も払ってないあなたたちに、ここを使わせないとイケないの』って言ってるのと、一緒でしょう」って、いつも思うんですけども、それが理由で使えないんです。そういうときだけ障害者扱いされることに、私は、ほんとに心が痛いんです。

選手は、反発しても、今やるべきことをしないとパラリンピックに行けないので、毎日、必死に練習してます。だから、そこまでなかなかケアできないんです。そうすると、どうするかっていうと、泣き寝入りしちゃってるんです。でも、私は、もともと健常者スポーツも経験しているので、「これはおかしい」。だって、高校生でも「インターハイに行く」っていったら、メーカーから私、靴ももらったし、ラケットももらいました。何で、日本代表がウエアを買わないといけないのか。

「障害者なのか、健常者なのか、選べ」と言われたんです。「もし健常者なら、わしはあんたを支援せん」と。「それは、おかしいでしょう」と言うと、お孫さんが重度の障害を持ってると言われたんです。今度、中学校に上がるらしいんですが、「高校生ぐらいの重たさもあるようになって、すくすく育て、それをアルファードに乗せてあげて、降ろしてあげて、人にじろじろ見られて、後ろ指指されながら、車椅子押してあげてるんや」って。私、それが耐えられなかったんです。

いろんな人を、私も見てきました。中には、生後1歳を迎える前に亡くなってしまった子も、5歳で生まれてこの方ずっとチューブ付けてる子も、学校に通いたくても闘病生活をずっとしてて院内学級しか行ったことないっていう子とかの、支援をしたりもしてました。もちろん、家族の方とも接したこともあるし。うちの家庭も、ちょっとギャグを狙う父親でも、いろんな経験をしたと思うんです。今

回、本を出版するときにいろんな取材をされましたが、母親はやっぱり当時のことを、ショック過ぎて記憶が抜けてたという部分があったんです。やっぱりそれぐらい、いろんなことを抱えて、私たち今を生きてると思うんです。

一番悲しかったのは、「身内に、障害を持った方が居る」という状況でも、そうやって偏見的な目で見てるのかと。私、今まで、何回も車椅子を押したことがあります。でも一度も、周りの目なんて気にしたことありません。義足を今日みたいに出して……、今は寒いですから、私も長ズボンはいえますけど、夏はもちろん半ズボンです。競技するときなんか見てください、むき出しです。私は、大分県で、一般の大会にずっと出てます。周りに、足のない人は居ません。私しか居ないんです。それでも、私は、一度も思ったこともありません。私の周りの人も、そういう人は居ません。

今を一生懸命生きている人を間近で見ながら、そう思ってるということに、私ものすごく腹が立ってしまいました。とにかく、私いつも思うんです。生きてさえくれば、何でも手助けできるんです。だって、車椅子だって、そうじゃないですか。階段上れないなら、抱えることはできますけど、そこに生きてくれてなかったら、存在しなかったら、ほんとにもう何もできないんです。

それがすごく悲しくて、まさか私、そういう言葉を、それこそ、ある程度の地位を持った人から言われるとは、ほんとに想像もしてなかったの、すごく衝撃的でした。私いつも講演の中で、「私たちが過ごしていること、生活していること、それは、皆さんが生活していることと何ら変わらないんですよ」という話をさせてもらうんですが、その時ほど、「こんなに、障害者として自分は生きてるんだな、この世で」と思ったことはなかったんです。

ぜひ、私に関わる人たちの中では、そういう偏見は持たないで欲しいと思います。また、これ、私は、ほんとに目に見えて障害がありますけど、私いつも言いますが、みんな障害を持つてると思うんです。それは、心の障害。あと、みんな……、私も、障害者になりたいくて、なったんじゃないんです。ある日突然、事故に遭って障害者になったんです。要するに、誰にでも障害者になる機会はあるんです。

そして、もう一つ忘れてはいけないんですが、皆さん、年は取ってしまいます。いつまでも、元気に歩けるとは限りません。もしかしたら、杖をつくだけで済むかもしれないけれども、車椅子に乗るかもしれません。糖尿で、足を失ってしまうかもしれません。

誰もが、人生を生きている中で、「障害」というものと向き合わなければいけないときというのは、必ずくると思うんです。そのときに、「今どう生きるのか」というのを、大切にしたいなと思います。そして、長い人生の中、1%でもいいので、人のためになること、人に手を差

し伸べる行動を起こすこと。これだけ、ぜひして欲しいなと思います。

「大きいことは、できない」と思うかもしれませんが、私も最初から陸上で花が咲いていたわけじゃないです。もともと、テニスもしてました。テニスも、そんな最初からいい環境でやってたわけではありません。でも、地味にこつこつやってきたからこそ、それが大きくなっただけなんです。皆さんに、何も出来ないことはありません。皆さんは、たくさんパワーを持っているんです。行動に移せるのか、移せないかだけなので、ぜひ1%でもいいです。手を差し伸べることというものを習慣づけてくれたら、私たちもうれしく思います。

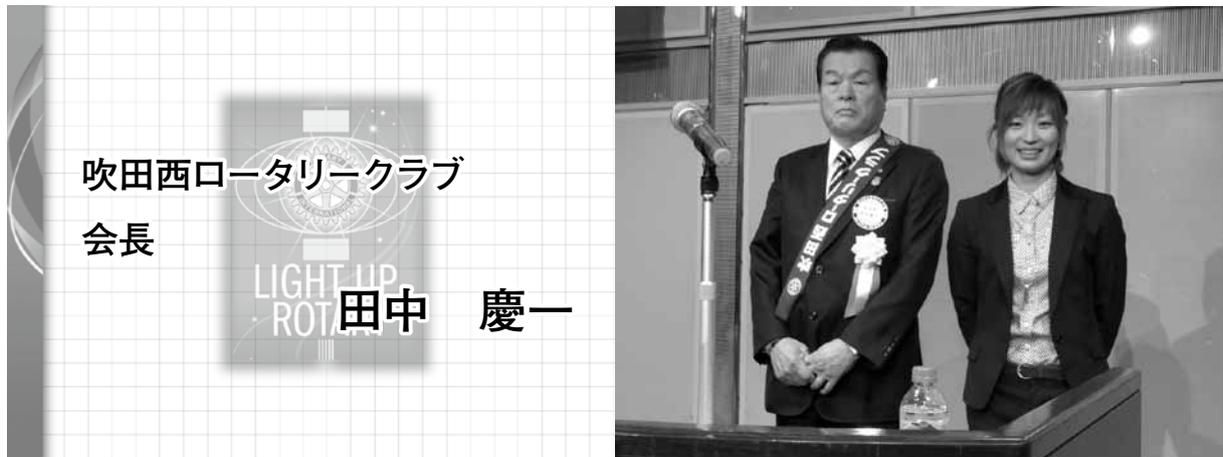
最後になりましたけれども、私もいろんなロータリークラブで講演させていただきましたが、こんな盛大に映像を用意していただいたことって、ほんとに少ないんです。というより、初めてでした。「少しでも、皆さんの、何か役に立つお話ができたらな」と思って講演をさせていただいてますが、その私の思いというものを、こうやって受け止めてくれるところがあるというのは、本当に感謝しています。

資金難にも、かなり困りながらの競技生活ですけれども、歳はちょっとと言いませんが、この歳まで競技を続けてこれています。そして、これは運命だと思うんですけれども、毎回、いい歳年を迎えるときに、地元開催の大きい大会があるんです。私は2020年の東京っていうのが、大チャンスだなと。「2008年のときになかえりかなえられなかったものが、ここでなかえられるんだな」と思っています。そして、今、指導をしてくれているコーチも、「『スポーツを始めよう』と思ったきっかけは、幼少期に東京オリンピックを見た」と言ってたんです。何か、時を経て、その場で、今度は私がコーチの代わりとして、「何が何でも、メダルを掴む」ということで、「どんなことがあろうが、東京までは現役を絶対に続ける」という覚悟で、今やっています。

次、また機会があって、ここに帰ってこることができたときには、皆さんに今度は義足じゃなくて、輝くものを見せれたらなと思います。こういうような機会を与えてくださりまして、本当にありがとうございました。



## 講師への謝辞



本日は、貴重なお話を聞かせていただきましてありがとうございます。

大分国体を目指していた矢先に仕事中の事故で右足膝下の切断をするか選択を問われた際に、普通であれば切断することの怖さや今後の人生へのしがらみを想像し、ネガティブな考えから、人生の挫折を感じる人が大半かと思うなか、前向きに決断され、本日の演題にもあります“あきらめない心”で陸上競技へ転向されました。日本記録を達成し、パラリンピックにも2回出場と言う輝かしい成果の反面、大変なご苦労と困難で壁にあたられた事も多々あったと思います。

メンタル面が強いだけでなく、しっかりと目標を定め、努力を積み重ねられた成果だと感銘を受けました。これから、16年リオデジャネイロ・20年東京オリンピックでの金メダル獲得に向けてさらに突き進んで行かれることと思います。

今後、中西さんがパラリンピアンとして世界で大活躍されることを期待し、応援させていただきたいと思っています。

本日は、本当に貴重なご講演、ありがとうございました。



## パフォーマンスショー



### 紹介

私達は2014年シーズンで結成10周年を迎えました。記念すべきシーズンにチームが見事三冠制覇をし、私達も非常に嬉しく思います。私達はホーム試合でのハーフタイムパフォーマンス、ガンバチアキッズ教室、選手紹介、選手入場、ピッチサイドでの応援、勝利すれば万歳三唱などたくさんの活動をしています。又、ホームタウンのイベントを通し、ガンバ大阪のPR活動も行っています。選手の皆様に勝利へと導けるよう今シーズンもサポーターの皆様と共に全力で応援していきます。

いよいよ今秋、皆さまのご支援で建設中の新スタジアムが完成いたします。メンバーのひとりひとりが更なる高みを目指して、新スタジアムと共に、ホームタウンに輝きを与えられる存在になりたいと考えています。

### 村岡リーダー 挨拶

「皆さん、こんにちは！ガンバ大阪チアダンスチームです。」



私達は主にガンバ大阪のホームゲームでのハーフタイムパフォーマンス、選手紹介、選手入場、試合前のイベントに2回出演しています。また、地域のイベントやお祭りなどにも参加させて頂いております。今日のイベントのテーマが「地域を輝かそう」ということで、私達ガンバチアもたくさんの地域のイベントに参加をし、地域を輝かせていければなと思っております。

そして、今年の秋にはガンバ大阪の新しいスタジアムがここ万博にできます。サッカー専用スタジアムなので、ピッチとの距離が近く、サポーターの熱い応援も感じて頂けると思います。新しいスタジアムはもちろん今ある万博スタジアムにも足をお運び頂ければ嬉しいです。次節ホーム戦は、4/3(金)の名古屋グランパス戦です。是非ともご都合がよろしければ、お待ちしております！！



### 木又サブリーダー 挨拶

お手元にガンバシストのチラシをお配りしてるとの事でしたので、一緒に見て頂きながら、「ガンバ大阪ではこのような活動をしているという事、今回のイベントは一人一人の輝きで、あなたの地域を輝かそうというテーマでしたので、一人の力は小さくても、みんなで力を合わせ、ガンバシストの様な活動を通して一緒に地域を盛り上げていきたい、ガンバチアもパフォーマンスを通して更に地域を輝かせていきたいと思っています。」

## クラブ紹介



1) 3分以内でクラブ紹介をお願いいたします。例会日・例会場所・会員数は必ず入れていただき、例会の風景・工夫・クラブの特色等、会員相互の親睦を図る為の工夫、同好会等、映像を活用し発表して頂きます。

2) 発表者は出来るだけ入会3年目以内の方でお願い致します。

ク ラ ブ 名	発表者	オペレーター
高槻東ロータリークラブ	猪俣 由 宇	高 木 大 介
茨木東ロータリークラブ	岡 田 康 夫	鱈 洲 健 三
茨木ロータリークラブ	鈴 木 一 正	長谷川 浩
茨木西ロータリークラブ	清 水 達 也	大 森 康 平
高槻ロータリークラブ	石 田 佳 弘	浜 田 厚 男
高槻西ロータリークラブ	下 園 大 介	森 本 榮 三
吹田ロータリークラブ	富 永 明	林 眞 基
吹田江坂ロータリークラブ	吉 野 通 洋	山 本 隆 弘
千里ロータリークラブ	丸 岡 敏 明	上 橋 芳 雄
千里メイプルロータリークラブ	山 本 友 亮	小 山 富 夫
摂津ロータリークラブ	西 尾 賢 司	中 尾 功
吹田西ロータリークラブ	堀 豊	木 下 基 司



高槻東RC 猪俣 由宇 さん



茨木東RC 岡田 康夫 さん



茨木RC 鈴木 一正 さん



茨木西RC 清水 達也 さん



高槻RC 石田佳弘 さん



高槻西RC 下園 大介 さん



吹田RC 富永 明 さん



吹田江坂RC 吉野 通洋 さん



千里RC 丸岡 敏明 さん



千里メイプルRC 山本 友亮 さん



摂津RC 西尾 賢司 さん



吹田西RC 堀 豊 さん

## 所感・次年度ホストクラブ紹介



所感を述べさせていただく前に、前年度第2組のガバナー補佐を務められました、吹田ロータリークラブの井上義信様が、去る3月8日にご逝去されました。

井上義信前ガバナー補佐の生前を偲ぶとともに、ご冥福をお祈りしたく、皆様で黙とうを捧げたいと思います。ご協力をお願い致します。

黙とう（約1分間） 有難うございます、ご着席下さい。

それでは、所感を述べさせていただきます。

半年以上前に吹田西クラブへ訪問させて頂いた時に、小林実行委員長から、IMの開催に当たりガバナー補佐としての希望はありますか?と聞かれました。

泉ガバナーの方針に沿ったロータリーにふさわしい、奉仕と親睦のバランスのとれたIMに、また会員の皆様がただ出席するだけでなく、一緒に参加できるIMにしていきたい。特に新しい会員の出番を作ってほしい。登録料は現状維持か、できれば下げてほしい。とお願い致しました。後で考えてみると、ずいぶん無理なお願いだったと反省しております。

今日のIMは、各テーブルに2組12クラブの会員が分かれて座り、まるで第2組が一緒になった北おおさかロータリークラブの例会に出席しているようです。さらに吹田西クラブの会員がテーブルマスターと務め、親睦をはかっていただきました。

中西麻耶さんからは、お話を通して「これからのロータリー活動への勇気」を頂きました。

ガンバ大阪チアダンスチームの皆様からは「これからのロータリー活動への元気」を頂きました。

12RCのクラブ紹介では、若い会員の皆様から「これからのロータリー活動への希望」を頂きました。

私の無理なお願いを見事に実現して頂きました、田中会長、小林実行委員長を始めとする吹田西ロータリークラブの皆様、心より感謝を申し上げまして所感に代えさせていただきます。

本当にありがとうございました。

それでは、次年度・IMのホストクラブを紹介させていただきます。

千里メイプルロータリークラブの高尾会長、壇上にお上がり下さい。



## 次年度ホストクラブ挨拶



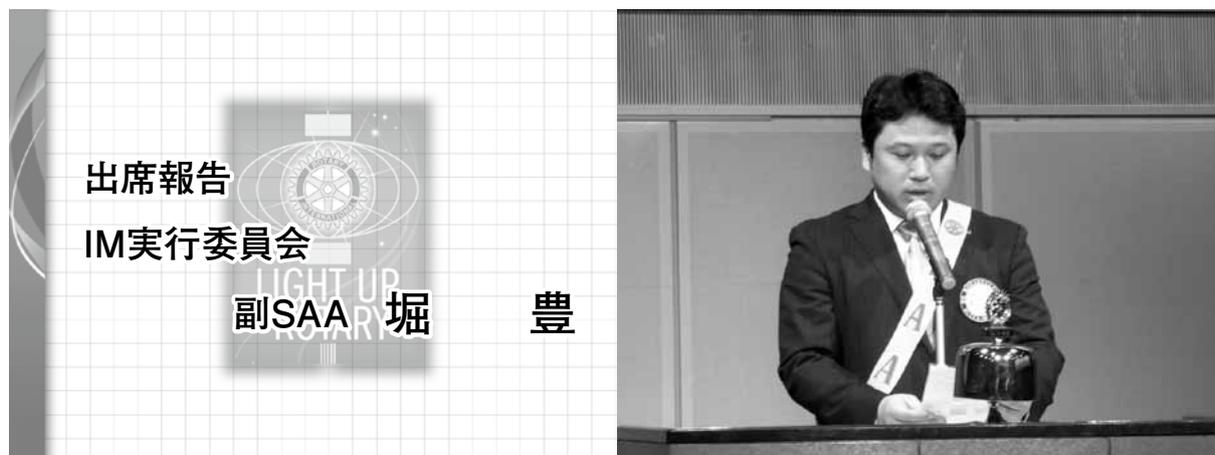
主宰者ガバナー 泉博朗様、ガバナー補佐 簡仁一様、ホストクラブ会長 田中慶一様、実行委員長 小林 哲様、本日はこのような素晴らしい INTERCITY MEETING に参加をさせて頂き誠にありがとうございます。千里メイプルロータリークラブは2015年2月に実行委員会を立ち上げ、黒川実行委員長を中心にIMを進めさせていただきますが、皆様方のご支援ご協力が成功に繋がると強く確信をしています。今後、当クラブからIMのご案内等で各クラブを訪問させていただきますので、何卒よろしくお願い致します。そして2016年2月27日（土）の2015～2016年度 INTERCITY MEETING には多数の皆様方のご参加をお願い致します。

**変革を!ロータリーを通じて奉仕(プレゼント)を!**



Rotary  
第2660地区

## 出席報告



来賓出席者	8名
主宰者出席	2名
RAC出席者	3名
IM2組出席者	193名
出席者合計	206名

## 参加クラブ

クラブ名	会長	会員数
茨木ロータリークラブ	戸川通夫	26名
茨木東ロータリークラブ	對馬康全	41名
茨木西ロータリークラブ	宮里唯子	27名
高槻ロータリークラブ	川畑孝彦	48名
高槻東ロータリークラブ	中川雄六	38名
高槻西ロータリークラブ	間石成人	20名
吹田ロータリークラブ	福室忠正	61名
吹田江坂ロータリークラブ	金馬隆仁	33名
千里ロータリークラブ	金子薫	35名
千里メイプルロータリークラブ	高尾修	23名
摂津ロータリークラブ	佐藤剛司	34名
吹田西ロータリークラブ	田中慶一	47名

# お 礼



本年度のRI会長ゲイリー・ホアン氏は、「Light Up Rotary」をRIのテーマに掲げられ、当地区の泉ガバナーは地区のテーマを「ひとりひとりの輝きであなたの地域を輝かそう」とされました。

そしてそれは、暗闇の中で黙って我慢するより一本でもろうそくを灯す事であると説かれました。我々ロータリアンの心の中には、疑いもなくその種火が存在します。しかしながら、その種火が炎となるか、その炎が我々一人一人を輝かし、我々の地域を輝かし世界を輝かし、暗闇の中で助けを求めている多くの人々を救う一助になるのかは、我々一人一人の意識と行動に掛かっていると言っても過言ではありません。

今回の講演者である中西麻耶さんは2020年に開催される東京パラリンピックを目指して活躍されているアスリートです。ある日突然の事故により、右足の膝から下を切断しなければならなかった21歳の女性が、その後幾多の困難と向かい合い、乗り越えていかなければならなかったか、そこには想像を絶するような心の葛藤と、現実との壮絶な戦いが有りました。それは、暗闇の中で我慢することなく、自らの手で炎を灯し輝こうとした、彼女の青春でもありました。今日、我々は彼女の「あきらめない心」を学ぶことによって、我々の心の中にある種火を改めて確認し、灯し、一人一人が輝くことによって、地域を輝かし、世界を輝かそう言う、崇高なロータリーの奉仕の精神を実践していきたいと考えています。

泉ガバナーは、就任にあたり次のような言葉を我々に投げ掛けられました。「明るいロータリー、待ち遠しいロータリー、わくわくするロータリーをめざそう」と。

IMの後半は、「明るく、待ち遠しく、わくわくするロータリー」を目指して、各クラブがどのような活動をしておられるか、その親睦活動を中心に発表していただきました。最近ではクラブ内のいくつもの行事や活動がメイキャップとして認められるようになったため、他のクラブの例会へ出席してメイキャップすることが殆ど無くなったように思います。その為、他クラブがどのような例会を行い、どのような事業を推進し、どのような親睦活動をされているのかを実際に知ることが出来ず、自分のクラブのことしか知らない、言わば井の中の蛙になっているのではないかと危惧しています。今回の各クラブの発表を参考に、今後のクラブ運営の一助にさせていただくことが出来るのではないかと考えています。

IM会場のすぐ近くに、今年の秋の完成を目指して新しい競技場が建設中で、完成の暁にはこの地域をホームタウンとするプロのサッカーチーム、ガンバ大阪のホームスタジアムとなる予定です。そのガンバ大阪のチアダンスチームが、休憩後すぐに我々の目の前でそのパフォーマンスを披露してくれ、楽しい時間を過ごすことが出来ました。

また、参加12クラブの皆さんの親睦を図るため、座席とテーブルの配置に工夫を凝らし、全員に分かれて座っていただき、どのテーブルにも、各クラブのどなたかがいらっしゃるように計りました。そして、吹田西ロータリーの歴代パスト会長がテーブルリーダーとして、また会員1名がサブリーダーとして皆さんをお迎えしました。

私たちは出来るだけ簡素でしかも楽しいIMを目指して準備して参りました。ご参加いただきましたロータリアンが、「手に手つないで」を唱和し、閉会の点鐘の時を殆ど全員で迎えて頂きましたことに、心よりお礼申し上げますと共に、今回のIMで改めて学んだ「ひとりひとりの輝き」を、次年度IMのホストクラブである千里メイプルロータリークラブへ引き継ぎ渡す事が出来たらと願っています。

最後になりましたが、ご来賓を始めIM2組12クラブのロータリアンの皆さん、そしてローターアクトの皆さんのご参加とご協力に改めて深く感謝の意を表し、お礼の挨拶とさせていただきます。

# 当日の風景





# 会計報告

収入の部		支出の部		
前年度繰越金	504,675	講演料・交通費		310,880
登録料 2,500円×433名	1,082,500	会場費	889,415	
地区補助金	300,000	会場賃借料	547,595	
書籍販売収入	40,000	会場付帯設備機材等	193,320	
受取利息	76	セルフコーヒー	148,500	
		報告書・プログラム作成費		400,496
		PRチラシ	92,880	
		当日プログラム	52,704	
		講演反訳料	17,852	
		報告書	237,060	
		会議費	26,700	
		書籍代（内寄付6,400円）		40,000
		書籍代	33,600	
		寄付	6,400	
		消耗品・雑費		31,412
		次期繰越金		172,448
収入合計	1,927,251	支出合計		1,927,251

## IM実行委員会組織

委員長 小林 哲  
副委員長 橋本 徹也  
副委員長 清水 大吾

委員会名	委員					
S A A	橋本 徹也	堀 豊				
受付	佐藤 原二	山岡英次郎				
司会	清水 大吾	矢倉 昌子				
ソングリーダー	毛利征一郎					
テーブルリーダー	瀧川 紀征	梶山 高志	毛利征一郎	村井 正雄	小川 勉	
	田中 慶一	宮川藤一郎	新井 清	家村 武志	石崎 克弘	
	尾家 亮	河邊 哲郎	鈴木 基弘	阪本 勝彦	仲辻 章	
テーブルリーダー補佐	本田 智教	荻田 倫也	青木 建雄	榎原 一滋	大藤 辰弘	
	長屋 興	瀬川 昇	西村 元秀	澁谷 清明	橋本 芳信	
	紙谷 幸弘	伊藤 泰充	木田 昌宏	由上 時善	井伊圭一郎	
救護班	坂口 道倫	郷上 勲				
記録	枚本日出夫	水間 正一	佐藤 原二			
オペレーター	木下 基司					
会計	荻田 倫也					





Rotary

## 吹田西ロータリークラブ

☎564-0051 吹田市豊津町9番40号 東急プラザ江坂1階  
TEL (06) 6338-0832 FAX (06) 6338-0020  
E-mail src@jasmine.ocn.ne.jp  
U R L <http://www.suita-west-rc.org>